Fusyo Collaboration letter

5 月 19 日　　No.9　　文責　廣田　秀俊

宿題のあり方について考える

本校では土、日の宿題は基本的に出していません。平日については、計算ドリルや漢字練習など、ある程度決まった宿題に取り組みます。土、日については、自分の課題に応じて自主的に学習を進めています。授業課題として、授業の進度や内容に関連した課題が出る場合はありますが、基本的には土、日の学びは自主的なものとなります。

児童が取り組んでいる内容としては、それぞれではありますが、漢字、計算練習、授業ノートのまとめなど学習の補完をするようなものや、飼育や栽培、調理、絵画、工作などの実技、習い事のまとめやお手伝いなど、幅広く行っているようです。休みの日に親子で自転車に乗る練習をしたというお話も昨年度聞かせていただきました。

平日の宿題を含め、宿題についてどうあるべきかを教職員で話し合っていく時間を設けました。今後も宿題のあり方について考え、子どもたちの学びが深化していけるよう検討していこうと思っています。

教職員からはこんな声が出てきました。

【宿題のあり方について】

・自分の探究に使う、家族の力を借りる、努力を認めてもらうツールとして考える
・家庭や子どもの様子によって、できる量や必要なものが変わるため強制するものではない
・学年によって意味合いはちがう 【低学年】:習慣 【高学年】:自分の探究や補充
・児童が将来的に、自分で決めて取り組み意欲につながる宿題を探究したい
・理想として自己調整学習的な家庭学習をできる子どもを育てたい
・宿題を減らす学校が増えてきている。自己調整できる力も今後は必要
・保護者目線に立つと何をさせていいのか、子どもが求めているものは何かを考えるのは困難
・宿題に学校、教師がどのような意義づけをするかによって、取り組ませ方は変わってくる

＜具体例＞・家庭学習の習慣づくり⇒一定量の宿題を毎日出す
・自己調整学習の力を高める⇒【継続型】1週間の総量を決め、自分のスケジュールをたて取り組む
【資質・能力型】週明けのテストに向けて計画を立て取り組んでいく

・宿題こそ自己調整学習のサイクルを生かして家庭での過ごし方にあわせた学び方にしていく
保護者から丸投げと思われないように何かしらの手引きや連携をしながら行う

・学校、学年として統一されていないと比較対象になるため、線はそろえておく
・子どもたちに任せるところ、教師が教えるところのラインを教師側が意図を持っておく
・どのくらいの量、頻度、内容で取り組むと資質・能力の育成につながるのかを考えていく
・何を目的とするのか、学校として何を目指すのか、目的を統一する必要がある
・宿題をどうとらえて活用するのかが大切
【児童】学びの習慣作りの一手だてとして　　【教師】児童の学習理解や家庭環境の把握の手立てとして
・家庭学習の習慣づけではあるが、家庭環境や個人差を考えると一律の宿題は変換が必要

ユニークな宿題として「家庭のびのびウィーク」と題して、児童一人一人が自分のためになる学習を、原則 7 日連続で取り組んでいる学校もあります。本校の宿題のない土、日の様子を鑑みながら、今後の宿題の形を模索していきたいと考えています。